

第 1947 回埼玉県教育委員会定例会

- 1 日 時 令和 5 年 1 月 26 日（木） 午前 10 時開会
午前 10 時 59 分終了
- 2 場 所 埼玉県教育局教育委員会室
- 3 出席者 高田教育長、戸所教育長職務代理者、坂東委員、小林委員、首藤委員、櫻井委員、石井副教育長、古垣教育総務部長、石川県立学校部長、石井市町村支援部長、小谷野教育総務部副部長、関根財務課長、松中保健体育課長、田中県立学校人事課長、阿部市町村支援部参事兼小中学校人事課長案浦書記長、岩崎書記、森山書記
- 4 会議の主宰者 高田教育長
- 5 会 議
- (1) 前回議事録の承認
- 全出席委員異議なく本件記載どおり承認
 - 高田教育長が、首藤委員を議事録の署名者に指名した。
- (2) 報告事項
- ア 県議会令和 4 年 12 月定例会概要について
- 関根財務課長（提出理由、会期、本会議の質問、文教委員会、新型コロナウイルス感染症対策特別委員会について説明）
- イ 「令和 4 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果について
- 松中保健体育課長（提出理由、「令和 4 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」結果、令和 4 年度調査結果の概要について説明）
- 戸所教育長職務代理者 埼玉県は全体的に全国の調査結果と比べて良い成績であ

ることが理解できました。説明の中で、「課題解決に向けて」という項目がありましたが、例えば、ボール投げについては昨年度も同様の結果だったと記憶しております。今回、具体的にどのように対応していくかということを示されているのですが、昨年度も同じように示されていて、それらの結果や効果などは検証されているのでしょうか。課題をどのように解決するかを考えるのは必要ですし、それに基づき動いていくのは必要ですが、結果として動き方やその方向が違っていれば、恐らく結果は伴ってこないだろうと思っています。ボール投げについては、「投げ方や投力向上に向けた取組の工夫や動画・資料の活用」と書かれていますが、昨年、一昨年に取り組まれたことに基づいてこのような導き方になっているのだと思いますが、その辺りのことを具体的に教えてください。

松中保健体育課長 ボール投げについては、御指摘のとおり長年の課題です。これについては、近年は、ボール投げに特化した取組というよりも、総合的な体力向上の取組の中に位置付けて向上を目指すという方向が良いのではないかという意見も頂いており、このような形で取組を進めていました。ただ、ここ2年間は新型コロナウイルス感染症の影響があり、運動に関する取組が全体的に低調に終わったということがありました。そのため、そういった視点での取組の成果としては、あまり上がらなかったと考えています。一方で、ボール投げについては課題であることは顕著であるため、関係機関あるいは専門家との連携については、一層力を入れていかなければならず、またそれらの周知を徹底することが必要であると考えています。これまでは、活用状況などの把握が十分にできていなかったという反省がありますので、今後については、資料等の提供と一層の活用を促すための取組を進めなければいけないと考えています。

戸所教育長職務代理者 個別の問題としては難しいことだと思います。今までは総合的な体力向上の取組を行うことで、ボール投げについてもそれにつなげて向上させるとしていましたが、今回は、ボール投げはボール投げで、例えば専門的な方を招いて、個別に高めていこうという考え方に変わったという理解でよろしいですか。

松中保健体育課長 総合的な体力の向上を求めていくことは継続しますが、その中でも重点的にボール投げについては力を入れて取り組んでいくべきだと考えています。取組の方向転換というよりも、取組をプラスしていくイメージとなります。

戸所教育長職務代理者 それらに加えて1点、非常に良いと思ったことがあります。自分の目標を決めることによって、それを意識することで、できたり分かったりすることがあるとの成果の説明がありました。これについては、先生や生徒に還元されているのでしょうか。目標を持って動いていくと、必ず学習をするプロセスの中でできたり分かったりすることがあるということを体験している人がたくさんいるということを、先生や生徒に伝えているのでしょうか。

松中保健体育課長 結果については、全県の学校に周知をしています。その上で、体育の担当者等の会議や研修会において分析結果をフィードバックし、学校での子供たちのモチベーションを高める工夫として、このように成果に上がっているということを伝えていくことで、学校での取組も評価し、それが子供たちにも還元されるというサイクルを考えています。

戸所教育長職務代理者 今回の件はあくまで学校での体力・運動能力の結果ですが、全ての事柄について自分が定めた目標に向かっていくと、これまで見えなかったもの、これまで感じられなかったもの、いろいろなものが見えてきて、結果的にその部分が自分なりに進化していくことになります。体力・運動能力に限らずあらゆることに共通だと思います。そのような習慣ができれば非常に良いことだと思っています。今後も引き続き指導いただければと思います。

小林委員 結果については私も保護者の立場から思うところがあります。調査対象の中学2年生の男子は、私の息子の一つ下の代です。コロナが始まったときは小学校の5年生くらいでした。その直後から運動する機会がなくなり、またその場所もなく、校庭も使えない状況で、一番身体を動かしたい時期に動かせなかった世代です。そのため、調査結果のとおり体力が低下してきてしまうというのは当然の結果であると感じています。また、高校3年生の娘が中学生のときの体育祭や体育の授業の様子と、今の中学生の息子の体育祭などの様子を

見ると、保護者としても、これは大変だと感じるくらい運動能力の違いを感じます。全国的に運動能力が低下していて、埼玉県も低下しているのは仕方がないことかと感じています。そもそもの話になりますが、埼玉県としては、この取組の目的、どこがゴールなのかということがとても気になっています。ボール投げについてもそうです。今の子供たちが、今の生活環境で、どこを目指しているのか、全国で1位を取ることが目的なのか、その辺りが少し分かりづらいと思います。私は、最終的な目的は子供たちが将来にわたって健康的な生活を送れるような理想的な運動習慣を作ることだと思っています。それを考えると、ボール投げにこだわりすぎているような気もしています。もう少し視点を変えていかないと、それらを求められる保護者や子供たちは苦しくなると思います。部活動の時間も減っていき、そういった運動する機会が減っていく中で、クラブチームなどの習い事でお金を払ってまで運動する機会を作らないと体力向上につながらないとする、それをしなければ健康的な毎日を送れる運動習慣を作れないことになるのか、そういったことも考えていかなければ、保護者などはずっと苦しいままになってしまうのではないかと感じています。確かに子供たちが学校生活の中で運動に触れられるのは週に3、4回の体育の授業が基本で、運動部に入っている子供は中でも運動して、かつ、プラスアルファでやりたい子供は週末や夜などを利用してクラブチームなどに入っていくことになります。中学校2年生の女子の結果が良いのは、私が個人的に周りの子供たちを見ていると、運動部やクラブチームに入って積極的に身体を動かしている子供たちが、良い結果の数字を引き上げているような気がします。これは埼玉県、さいたま市の子供たちがそのような活動をする子が多いから、そのような結果の数字が出ているということだと思っています。このような状況を学校現場として良しとしてしまうと、それは違うのかなと思います。学校で最低限のことができるようにすることを目的とすることが私は良いと思っていて、そこでボール投げの結果を伸ばすということにこだわりすぎるのであればそれは違うのかなと思っています。運動能力結果は経年で見ていくものになりますが、あくまでも、ゴールは子供たちが将来的に健康な毎日を送れるようにす

るということだと思いますので、それらも考えながら、細かくなりすぎないような対策を、全体的に底上げできるような目標を持って取り組んでいただけると良いのではないかと、保護者の立場からは思いました。

松中保健体育課長 委員御指摘のとおり、体力・運動能力については、子供たちが生涯にわたって健康であるために、一定の体力を身に付けるために主体的に運動に親しむといった運動習慣を作っていくことが目標だと考えています。先に申し上げましたとおり、総合的な体力向上という視点で対応していくことが大事であるということに変わりはありませんが、全体のバランスを見たときに極端に劣っている部分があれば、少しでもその部分を補っていくということで、単純にボール投げについてのみ突出して時間を費やして対応していこうということは考えていません。いずれにしても、子供たちが生涯にわたって健康であるためには、主体的に運動に親しむこと、自分でその時間を作っていくという習慣が必要ですので、こういった視点を今後は大事にしていかなければならないと考えております。

坂東委員 小学校５年生のボール投げでは全国の中で埼玉県は下位ですが、中学校２年生になるとそれなりの結果として出てきます。このような傾向は、首都圏などの都会で見られていることなのか、それとも埼玉県だけなのでしょう。それから、そのように考えた際に、今の生活環境から、子供が小さいときから、公園などでは他人の家にボールが入ってしまうのでボールを投げてはいけませんなどと言われていると思いますので、そういったことがない環境で育った子供は数値が高いなど、そのような差があるのであれば教えてください。

松中保健体育課長 現状を申し上げますと、委員御指摘のとおり、大都市圏の子供については低位であるとの傾向が出ています。例えば、東京、大阪、神奈川、千葉、愛知などは、順位は軒並み３０位台後半から４０位台に固まって位置しています。ただし、埼玉県は中学校２年生になると順位が上がってくるという点で、今申し上げた都県とは違っています。

坂東委員 少し環境を変えてあげると体力向上に繋がっていくこともあるのだろうと思います。それから、肩が固まってしまうと身体のいろいろなところに影

響があります。１０歳くらいの小さい子供がずっとＩＴ機器を使っていたり、あまり外に出なかったりします。ですので、保育所、小学校低学年など、もう少し低年齢から、それから家庭においてもバーチャルで遊びながら身体を動かせる機器もありますので、普段の生活の中に運動を取り入れていくと、１２、１３歳頃の大人の身体になるときに少なくとも基準くらいの体力に近付けるのではないかなという印象があります。

首藤委員 資料にある握力からボール投げまで全て、特定の運動やスポーツのみに影響するものではなくて、どの競技にも通用するような基本的な運動能力だと思います。ですので、この結果は、教員が目標を持って指導して取り組んだことの成果であると思うのですが、それと同じくらい日常的な運動習慣の成果であると思っています。例えば、登下校、休み時間などでの校庭などでの遊び、こういった運動習慣があるからこのような結果に繋がっているのかなと思いますので、これを引き続き資料にある「課題解決に向けて」の「ウ 家庭での運動機会の増加や生活習慣の改善に向けた保護者等との連携」にからめて、生徒たちの家庭に伝えていただければと思います。特定の部分、ボール投げだけ取り出して体育の授業で克服するのだという指導をしてしまうと、かえって運動嫌いな子供が増えてしまうかもしれませんので、その点御留意いただければと思います。

松中保健体育課長 委員御指摘のとおり、やはり子供たちが運動やスポーツを好きになってくれることが、生涯にわたっての運動習慣、そして健康の維持、体力の増進の基盤になると思います。このような視点を大事にして、取組をしつかりと続けていきます。併せて、家庭の御理解をいただきながら、日常生活全体の中での運動の価値を上げていけるような取組ができるよう考えていきます。

高田教育長 私から坂東委員にお尋ねしたいことがあります。肥満傾向の児童生徒に関する記述が資料１１ページ以降にあります。この点について、我々はどうに理解していけばよろしいでしょうか。埼玉県も全国と同じような傾向が見られますが。

坂東委員 今、小児科学会の方でも肥満傾向にある児童の増加については懸念し

ています。これには様々な要因があるだろうと言われています。それと同時に、いわゆる生活習慣病が低年齢化してきていまして、高血圧や糖尿などですが、従前では加齢に伴うものが、肥満との関係なのか低年齢化しているのは事実です。そして、ここ３年間はやはりコロナの影響もあって、経年変化の急激なカーブがここ２年程見られます。ただ、女子は中学生くらいのいわゆるお年頃になると、自身の体型などに留意するので若干増加率が低くなります。家庭での食事習慣についても、保健学会や栄養士学会でも、どのようなカロリーになっているのかなど、調査しているところです。これらは運動習慣と間違いなくリンクしていると理解しています。

(3) 次回委員会の開催予定について

２月８日（木）午前１０時

<非公開会議結果>

第２号議案 教職員の懲戒処分について

非違行為を行った県立南稜高等学校の女性教頭（６２歳）に対して、戒告する懲戒処分を決定しました。

第３号議案 教職員の懲戒処分について

非違行為を行った富士見市立水谷東小学校の女性教諭（２５歳）に対して、免職する懲戒処分等を決定しました。